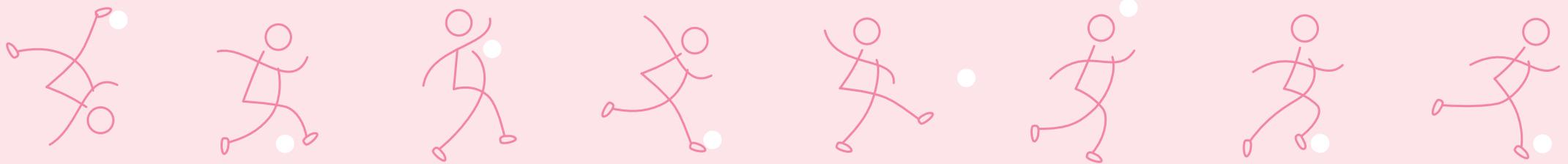


PASS TO THE FUTURE

HOKKAIDO FOOTBALL ASSOCIATION

vol.2



[北海道のフットボールを支える女性たち]





皆さんの未来につながりますように



はじめに

2020年度から影響が続いた新型コロナウイルス感染症も2023年5月より5類に移行し、通常の形でのサッカー大会運営が戻りつつあります。

コロナ禍で大変なことも多々ありましたが、「そんなときでも私達ができることが何かないか」と考えました。その一つで(公財)北海道サッカー協会(以下HKFA)女子委員会で取り組んだことが、JFA女子サッカー事業として『PASS TO THE FUTURE ～北海道のフットボールを支える女性たち～』という冊子の発行でした。JFAが発行した『サッカー × キャリア × 未来～ Your Life with Football』を参考に、北海道で女子サッカーに関わっている女性について知っていただき、生涯に渡ってサッカーに関わるきっかけになればと思い作成しました。第1弾では北海道の女子サッカーに関わる21名の女性にご自身の経験を語っていただきました。

冊子は北海道内の女子サッカー関係者にとどまらず47FAにも届けられ、反響が大きく、報道機関に取り上げていただくこともありました。

第1弾発刊から3年が経過しましたが、第1弾発刊後に活躍されている女性を紹介したく、第2弾の発刊の運びとなりました。またHKFA女子委員会での事業紹介の機会として、男女問わず北海道の女子サッカーを支えてくださっている方々から事業紹介をしていただいております。

本冊子は、女子サッカーで選手として活動されている方については「選手以外のサッカーの関わり方」について知る機会、スタッフとして関わっている方は仲間を知る機会となると思います。以前女子サッカーに関わっていた方については懐かしく、まだ女子サッカーに深く触れていない方には新鮮な思いと女子サッカーへの興味が芽生えるものになれば幸いです。『PASS TO THE FUTURE』第2弾が第1弾に続いて、女子サッカーに関わるの皆さんの将来に向けたPASSとなり、さらにその先にもつながっていくことを願っています。

末筆ではございますが、本冊子作成にあたりご協力をいただいた皆様に、心より感謝申し上げます。

PASS TO THE FUTURE

公益財団法人 北海道サッカー協会
理事・女子委員長

中川 綾子

[INDEX]

はじめに 2

中川 綾子

INDEX 3

17人のPROFILE

MESSAGE

01 石崎 民枝 5

02 松倉 美加 6

03 黒澤 幸子 7

04 蝦名 宏美 8

05 大村 美詞 9

06 阿部 恵理子 10

07 阿部 美季 10

08 赤間 奈津美 15

09 鈴木 まなみ 16

10 五十嵐 優 17

11 佐藤 美幸 19

12 伊東 美智子 20

13 渡邊 真結子 21

14 廣中 千映 22

15 布川 久美 23

16 黒瀬 育美 24

17 梶野 滋子 25

PASS TO THE FUTURE

鷺津 裕美 32

大岩 真由美 32

事業紹介

審判員の役割 11

道新旗北海道女子サッカーリーグ 11

北海道レディースエイトリーグ 12

全道O-30女子サッカー大会 12

道新カップ北海道女子8人制サッカー大会 13

大学 13

U-18 (高校生) 年代 14

U-15 (中学生) 年代 14

女子ユースダイレクターの役割 18

国体サッカー競技少年女子 北海道選抜 18

フットサルの取り組み 26

各ブロックの取り組み 27

北海道U-13女子8人制サッカーフェスティバル 29

U-12 (小学生) 年代 30

キッズ 30

JFA女子サッカーデー 31

本誌は、17名の「北海道のフットボールを支える女性」に焦点をあてるとともに、「女子サッカー」に関する事業をご紹介します。ご紹介する女性の取り組みに関連する事業紹介ページを近しくすることで、より女性たちの活動の場への理解を深めていただければと考えております。



TAMIE ISHIZAKI

01

石崎 民枝

[札幌市出身]

(一社)札幌地区サッカー協会 副会長・同事務局勤務/
(特非)札幌フットサル連盟 会長/
札幌地区少年サッカー連盟 顧問

[支えてくれているひと]

未経験者の私をここまで導いてくれた全ての人達。今も周りでサポートしてくれる仲間たち。そして、好き勝手させてくれる家族にえられて今があります。

MIKI ABE

07

阿部 美季

[函館市出身]

サッカー2級審判員/フットサル2級審判員

[目標にしているひと]

今一番目標にしているのは、一緒に活動させて頂いている稲葉里美さんです。頼ってばかりですが、稲葉さんのような審判員になりたいと思っています。

MAYUKO WATANABE

13

渡邊 真結子

[札幌市出身]

ノルディーア北海道 マネージャー

[支えてくれているひと]

直接的にはGMの三浦さんや監督の米山さんに支えられていますが、選手にも支えてもらっています。一緒に頑張りたいと思える仲間です。

MIKA MATSUKURA

02

松倉 美加

[美唄市出身]

千歳地区サッカー協会 副会長/
千歳サッカー協会 会長/千歳地区フットサル連盟 会長
千歳市議会議員/司会者

[影響を受けたひと]

多くの人から影響を受けてきました。人それぞれの良い面に接するたび、尊敬の気持ちを抱きます。

NATSUMI AKAMA

08

赤間 奈津美

[音更町出身]

(公財)北海道サッカー協会 技術委員会
女子ユースダイレクター 道東担当/
(一社)十勝地区サッカー協会 女子委員長・フットサル委員
・キッズ委員 / (一社)北海道フットサル連盟 女子委員/
NOSAI北海道 十勝統括センター 十勝中部支所 業務課

[憧れているひと]

自分にはコミュニケーション能力が足りないと感じています。栗山英樹さんのコミュニケーション能力には憧れます。

CHIE HIRONAKA

14

廣中 千映

[杜警町出身]

(一社)コンサドーレ北海道スポーツクラブ
コンサドーレサッカースクールマスター

[後押ししてくれているひと]

家族の支えがあったから今の私があります。朝早くから夜遅くまで送迎をしてくれたり、遠い場所でも応援に来てくれました。道外でサッカーを続ける後押しをしてくれました。

SACHIKO KUROSAWA

03

黒澤 幸子

【苫小牧市出身】

苫小牧地区サッカー協会 副会長

【感謝しているひと】

今私が協会でいろいろなお仕事をさせていた
だけるのは、大泉さんと石塚さんに出会うこと
ができたからです。お二人には、本当に感謝し
ております。

HIROMI EBINA

04

蝦名 宏美

【沙流郡出身】

(一社)札幌地区サッカー協会 女子委員長／
HABATAKE 代表

【支えてくれているひと】

家族が支えになっています。娘たちが小さ
かった時も日曜日にサッカーに行かせてくれ
て、その間は娘たちを子守してくれました。

MIKOTO OMURA

05

大村 美詞

【岩見沢市出身】

サッカー女子1級審判員／
空知地区サッカー協会審判委員会女子部／
北海道教育大学岩見沢校サッカー部
マネージャー・女子サッカー部

【見守ってくれるひと】

家族は、高校1年生の時に審判を始めたいと
言ってから今まで、私のやりたいという気持
ちを一切否定せずに見守ってくれました。自
慢の娘になれるように頑張りたいです。

ERIKO ABE

06

阿部 恵理子

【幌延町出身】

(一社)札幌地区サッカー協会 審判委員会・女子委員会委員
NPO法人札幌フットサル連盟 専門員／
サッカー2級審判員・2級インストラクター／
フットサル2級審判員・3級インストラクター

【憧れているひと】

全道フットサル選手権アルーサ優勝時の水上
玄太選手に感動したのを覚えています。その
ときに担当されていた和田安弘審判員にも憧
れています。

MANAMI SUZUKI

09

鈴木 まなみ

【小樽市出身】

(公財)北海道サッカー協会 技術委員会
女子ユースダイレクター道央ブロック担当／
小樽Corsa'rio GKコーチ・事務局／
小樽地区サッカー協会 女子委員会 普及委員

【リスペクトしているひと】

同じ女子ユースダイレクターの各ブロックの
4名の皆様には、分からないことを親切に教
えていただき感謝しています。指導者として
リスペクトしています。

YU IGARASHI

10

五十嵐 優

【恵庭市出身】

(公財)北海道サッカー協会 技術委員会
女子ユースダイレクター道北担当／
中富良野町立中富良野中学校サッカー部・
旭川女子アチーブ コーチ

【私の理想】

緑が丘中学校の監督の田中拓也先生は学校
の仕事、部活動の運営、ユースダイレクター
の仕事、子育てと、何に対しても真摯に向き
合っていて、私にとって私の理想です。

MIYUKI SATO

11

佐藤 美幸

【浦河町出身】

(公財)北海道サッカー協会 女子委員

【応援してくれるひと】

夫(元美香保FC)は現役時代から指導者やサ
ロンフットボールの普及、大会運営に携わり、
常にサッカー中心の生活であり、息子とともに
私の活動を応援してくれています。

MICHIKO ITO

12

伊東 美智子

【札幌市出身】

北海道シニアサッカー連盟 副理事長・事務局

【リスペクトしているひと】

支えになっているのは身近にいる主人の存
在でしょうか。継続の原動力は皆さんとの関
わりが気持ちをリフレッシュさせてくれます
し、気持ちを若々しくさせて貰っています。

KUMI NUNOKAWA

15

布川 久実

【札幌市出身】

クラブフィールズ・リンダ コーチ／
新札幌整形外科病院 手術室看護助手

【リスペクトしているひと・支えてくれているひと】

今まで指導して下さった監督・コーチたちを
リスペクトしています。現在ある自分の元にな
っています。そして、両親、サッカー・フッ
トサル仲間、友人、選手が支えになっています。

IKUMI KUROSE

16

黒瀬 育美

【岩見沢市出身】

北照高等学校女子サッカー部 顧問

【支えてくれているひと】

チームが私の支えです。監督、コーチ、卒業
生や保護者も含め、一緒に戦い、イベントは
全力で楽しみ、私も仲間に入れて支え合っ
てくれた選手のおかげで続けることができました。

SHIGEKO KAJINO

17

梶野 滋子

【札幌市出身】

(一社)北海道フットサル連盟 常務理事・女子委員会委員／
北海道Corrida・de・Toros.L選手／
セントラルフィットネスクラブ24東苗穂勤務

【支えてくれているひと】

やはり、夫です。フットサルの仕事は夫の協
力なしでは続けることは出来なかったかもし
れません。たまに、悩んでたら手伝おうか？
なんて、言ってくれます。感謝です。



TAMIE ISHIZAKI

石崎 民枝

(一社)札幌地区サッカー協会 副会長
 同事務局勤務
 (特非)札幌フットサル連盟 会長
 札幌地区少年サッカー連盟 顧問

息子さんの少年団入団をきっかけにサッカーの世界に飛び込んだ石崎民枝さん。

選手を第一に考え、つながりを大切に作る誠実なお人柄で、
 札幌地区のフットボールファミリーを温かく見守っています。



4種年代との関りが、 世界をどんどんひろげていく

中学入学直後、オーバーヘッドキックというものを目の当たりにする機会があり、それが私とサッカーのファーストコンタクト。衝撃を受けただけで、自分自身が競技をすることはないままでしたが、時がたって息子が入団したサッカー少年団の父母会代表になったことがきっかけで三角山 TRES サッカースポーツ少年団の立ち上げ時の監督となりました。チーム監督として必要とされ審判資格も取得しました。少年団結成直後の札幌フットサル大会で BEST4 になったとき、良い選手をたくさん預かっていることを自覚させられ、大切に育てなければと思いました。未経験ながらも選手や保護者の皆さん、指導者仲間に恵まれ、約8年の指導者としての活動の中、楽しいチーム運営ができたと思います。

この4種(U-12)年代での取り組みの中で関わることでできた選手、指導者、審判の



方に人脈を広げていただき、いろいろな人と繋がることができて、世界が広がっていききました。その延長として、やがて札幌市サッカースポーツ少年団連盟中央区代表理事となり、事務局次長となり、さらには、札幌地区協会監事、そして前会長の滑川先生にお声がけをいただき、現職へとつながっていきました。

札幌地区協会は、札幌市、江別市、石狩市、当別町の約13,000名のサッカーファミリーを統括する組織です。北海道15地区協会の一つでありながら、その規模から5ブロックの一つとしての役割を担っています。北海道コンサドーレ札幌、エスポラーダ北海道など北海道を代表するチームも札幌地区協会に所属しており、また、札幌ドームや厚別競技場のある都市だからこそ、Jリーグ運営や国際大会などの注目される大会運営にも力を注がなければなりません。さらに選手数の多さは、膨大な登録作業を伴います。正確さを必要とする業務は、熟練したプロパーの事務局員であっても途方もない作業量であり、2023年度の期中から、私も副会長と兼務し事務局の一員として働き始めました。

サッカーを好きなまま 大人になってほしい

もう一つ兼務している役職が、札幌フットサル連盟の会長です。札幌地区少年サッカー連盟のフットサル担当事務局次長になった事がきっかけとなり、前会長の山脇先生にお声がけ頂きお受けしました。会長とはいえ、フットサルというスポーツの裾野を広げるため、

常に前を見て進んでいく素晴らしい仲間たちと一緒に、大会の運営役員として稼働しています。運営役員として関わると、どの種別・性別でも楽しそうにボールを追いかける選手を見ることができるので、もっと良い環境を作らなければという思いになり、やりがいがあります。

札幌フットサル連盟は今、札幌からフットサルを広げるためにいろいろな活動をしています。特に2023年度から始めたフットサルトレセンは、技術委員が前年度の全道U-12地区予選、全日本U-12地区予選の全試合(200試合以上)を視察して選手を選考し活動しています。この年代の女子は体格、運動能力ともに男子を上回る子も多く、性別関係なく選考しております。今のフットサルトレセンからFリーグの選手、審判員、指導者が出ることを夢見ています。北海道は、冬が長く、外でサッカーができる期間は限定されるので、フットサルが競技を続けるためのカギではないかと思っています。とくに、女子選手は、4種から3種になる時の女子の進路先として、気軽にフットサルを選んでもらえるようにしたいと考えています。

私にとって、卒団生たちがサッカーを好きなまま大人になっていることが、サッカー・フットサルに関わってきて一番うれしいできごとです。いろいろな悩みはあると思いますが、自分の好きなことを諦めないでほしいです。諦めるのではなく、一度立ち止まり考える時間にしてください。その時は、一人で考えず周りに相談して欲しいです。結論を出すのは自分自身ですが、色々な意見を聞いてその時最良と思える道を進んでください。間違いに気づいたら、そこからコース変更すればいいだけです。何歳になっても挑戦は出来ます。私が、少しでも皆さんの力になれたらと思っています。



MIKA MATSUKURA

松倉 美加

千歳地区サッカー協会 副会長・千歳サッカー協会 会長

千歳地区フットサル連盟 会長

千歳市議会議員・司会者

*千歳地区サッカー協会は
千歳・恵庭・北広島の
3つの協会で構成されています。

市議会議員として街づくりにご尽力されている松倉美加さん。
サッカー経験がないからこそフラットな姿勢でサッカー界を俯瞰し、
選手たちやスタッフの間近でスポーツの力を感じながら、
ご自身にできることを探求してくださっています。

コロナ禍の2021年、恵庭市議会議員で千歳地区サッカー協会会長の小橋薫さんから千歳サッカー協会の会長にならないかと誘われたことは、私にとって思ってもみないお誘いでした。サッカーボールを蹴った経験もなく、務まると思えず、最初は丁重にお断りしたことを覚えています。それにもかかわらず、今では各種サッカー大会に足を運び、勝利に喜びを爆発させる選手や悔し涙を流す選手たちの姿に胸を熱くさせられ、スポーツの力を実感し、自分にできることは何かとグラウンドで問いかける日々を過ごしています。



好奇心が原動力

美唄市に生まれ育ち、1989年に高校を卒業して、独り立ちの手段として航空自衛隊に入隊。小松基地を中心に3年間活動しました。男女雇用機会均等法が制定されて間もないころに入隊したこともあり、振り返ると女性活躍の frontline に立っていたのだと思いますが、上司や仲間にも助けられ、任務を果たしていくことができました。自衛官としての活動は何もかもがはじめてのことばかりでしたが、持ち前の好奇心で、できることを少しずつ増やして身につけていくこと、関心を持ってやり続けることの大切さも学んでいきました。

92年に北海道に戻り、新千歳空港のインフォメーション業務を行う会社に就職。約7年で退職した後、アナウンサーアカデミーに通い、やがて札幌の司会事務所で実践を積みながら司会を生業にするようになり、3年後独立しました。さらに、司会の仕事をきっかけとして、千歳青年会議所に入会しました。



時代に即した事業の企画・運営を通して、社会起業家として人間力・組織力を学び、マチの魅力の醸成や豊かな社会の創造に寄与したいと活動をしていました。青年会議所を卒業したあとも、青年会議所という枠はなくなりますが、自分で何かやっていきたいと思っていました。

市議会議員として、 副会長として、できること

青年会議所の卒業後も、街づくりに関わり続ける選択肢として、市議会議員に立候補しました。少しずつ人やコトの輪を広げ、キャリアを積み重ねてきたとき、千歳サッカー協会の会長のご推薦をいただきました。

一度はお断りしたものの、小橋さんからは、若い方の意見や女性の視点が、サッカー界に必要であり、その両方を持っているよとお誘いをいただき、お受けすることとなりました。2021年にスポーツ庁が示した中央競技団体のガバナンスコードでは女性理事割合40%が掲げられていますが、千歳協会では当たり前のように女性役員を受け入れてくださる素地があり、また、「女性が必要」というよりも、私自身を必要としてくださったように感じ、覚

悟を決めました。

千歳地区サッカー協会は、千歳、恵庭、北広島の3つの地区の競技活動を担う組織です。コンパクトな地区のため、選手を集めやすくトレセン活動が盛んです。また、文教大学附属高校が札幌から恵庭に移転したことで、美しい人工芝グラウンドのある高校サッカーの拠点が生まれたことも近年の大きなトピックです。校長の佐々木淑子さんの魅力もあり、また、道内有数の強豪女子サッカー一部の選手の皆さんの礼儀正しさもあり、すっかりサポーターになってしまいました。

分からないことだらけなので、とにかく大会に足を運ぶこと、現状を知ることから始めました。はじめて接するサッカーの世界は、もちろん感動を伴うものではありませんが、それ以上に、チーム運営も、大会運営も、審判も会計も何もかもを少人数で、業務を重複しながら手弁当で行っていることに驚きました。選手のため、子どもたちのため、という気持ちの強さにサッカー界が支えられていることはすばらしいと思いつつも、少しでも支える方々の環境もよくしたいという思いにかられます。また、中学校の部活動改革の波の中、子どもたちがスポーツから遠ざかることのないよう、そして、先生にとっても、地域クラブの指導者の方にとっても地域の実態にあわせた最善の選択肢をとっていかなければならないと思われました。

グラウンドで、選手やスタッフの皆さまのそばで、肌で感じた思いは、議員として街づくりを担う私の中に根付きつつあります。まだ、サッカー界に何ができるのかは手探りの部分はありますが、この思いを育てながら、副会長としての任を果たしたいと考えています。

SACHIKO KUROSAWA

黒澤 幸子

苫小牧地区サッカー協会 副会長

選手としても活躍しながら、キッズの指導に尽力されてきた黒澤幸子さん。

大会後、施設の隅々まで清掃をしてくださる黒澤さんの姿に、感謝の気持ちを忘れないというリスペクト精神を体現されていると感じます。



家族の中心にサッカーがあり、 チームメイトも家族のような存在に

1989年苫小牧にも女子サッカーチームを！というシニアの方々の声掛けで社会人、主婦の仲間が集まり、苫小牧ではじめての女子サッカーチーム若草レディースが誕生しました。学生時代からサッカーを始めていた夫の影響で、チームに参加。チームメイトは家族のような存在で、30年に渡って現役選手として楽しく活動しています。3人の子供たちもそれぞれサッカーを始め、今は孫も一緒にサッカーをしています。みんなで、サッカー談義をしたりサッカーを楽しんだり、黒澤家はサッカーを通して、家族の在り方を考える機会にもなっています。

子どもがサッカー少年団にいたことで、審判にと声をかけていただき、苫小牧ではじめての女性の審判員となり、審判活動も行いました。さらに、若草レディースの監督だった大泉さんから苫小牧地区の女子委員長を任



され、大会運営にも携わることになりました。その後、若草レディースの仲間から多くの女子委員長が誕生しています。

キッズ巡回指導との出会い

サッカーとの関わりの中で、自分自身の活動に大きな影響を与えたのは、北海道協会主催の巡回指導です。1年間でしたが、YAGENフットボールクラブ代表で苫小牧サッカーの土台をつくりあげてきた石塚東洋雄さんと、元コンソードレの選手が指導者となり、札幌、函館、帯広、釧路など、道内の幼稚園と保育園を回りました。幼児年代からのサッカー普及と体を動かすことの楽しさを経験させ、心身共に健康でたくましく育てて欲しいという願いを込めて、参加させていただきました。

保育士として10年間勤務していた経験にも助けられ、その後、キッズリーダーとキッズテクニカルコーチの資格を取得しキッズの指導にあたりました。ある園に、自閉症の子と一緒に参加していました。人と関わるのを嫌がり、ずっと保育士の傍から離れずにいた子が、終わって帰る時私の傍にきて手をさしのべてきました。抱っこしてあげると、私の胸に顔を埋めしばらくじっとしてからボールを指さしました。ボールをコロコロころがしてあげると、コロコロ返ってきて、満足して部屋に帰っていきました。保育士さんもその様子にびっくりしていました。きっと、一緒に

遊びたくなったんですね。微笑は心を開いてくれる。心の耳で子供の心を聞き、全身で子供の気持ちを受けとめてあげることが、私たち大人の役割なんだと思いました。このような経験を経て、苫小牧地区協会内に、キッズ委員会を立ち上げて、巡回指導を苫小牧でも実施できればと提案し、現在は「サッカーしたい子あ〜つまれ！」などの事業を通して、サッカーの楽しさを伝えています。子供は心のままに生き、感動を全身で表現してくれます。どうしてそんな小さな体の中にあんなエネルギーがあるのかと驚きます。子供と接するたびに、新しい発見があり、反省があり意欲が湧いてきます。大切に愛情をもって、子供の可能性を引き出していける大人でありたいと思っています。

成長のお手伝いをしていきたい

幼稚園の時に指導した子が高校生になってもサッカーを続けてくれていると、本当にうれしく思います。サッカーを通じてたくさんの仲間と出会い、楽しいことやつらいこともあると思いますが、すべてひとつひとつ必ず自分のこれからにつながり、次のステップへと成長していきます。サッカーができることに感謝の気持ちと、関わっている方々にリスペクトを忘れず、大好きなサッカーを続けていってほしいと願っています。

そのために副会長としてできることを精いっぱいやっていきます。指導者育成や女子の普及、トレセン活動の充実にも力を入れたいと思います。これからもたくさんの人たちが、サッカーに出会える機会や環境をつくり、人とのかわりの中で、サッカーができる喜びと感謝の気持ちを忘れずに、人としても成長できるお手伝いができればうれしいです。



HIROMI EBINA

蝦名 宏美

(一社)札幌地区サッカー協会 女子委員長
HABATAKE 代表

サッカーは生涯スポーツと明言する蝦名さん。

ご自身がサッカーを楽しんでいるからこそ、運営にも力が入ります。

若年層の普及とともに、シニアの環境も札幌地区から改善していきたいと積極的に活動されています。



剣道からサッカーの世界へ

小中高と剣道一筋、3段の段位を持つ私が、サッカーに出会ったのは、30歳の頃。友人から誘われたことがきっかけです。今でも尊敬する苫小牧協会の黒澤さんには若草レディースで本当にお世話になりました。その後、夫の転勤により札幌に暮らすようになり、それに伴ってHABATAKEに所属することになりました。また、O-40のチームであるラヴァンダでも活動しています。フットサルではサルーテやmmcでも学ばせていただきました。今ではチーム代表を務めているHABATAKEには、若草レディース時代にO-30全道大会で文字通りズタボロに負けたことを未だに忘れたことができません。でも、とてもよい経験になりました。そして、今でも思い出すだけでやる気がわいてくる経験は、ラヴァンダの一員として静岡で戦ったO-40全国大会です。あの記憶が、現役でサッカーを続ける原動力になっています。



選手だけではなく、審判員の資格も取得。大会運営にも積極的に関わるようになり、主に記録を担当させていただきました。苫小牧地区の女子委員長も務めさせていただき、若草レディースの先輩方や石塚東洋雄先生にご助言をいただきながら、大会運営のノウハウを覚えていきました。

札幌地区の女子委員長として

長らく札幌地区の女子の活動を支えてくださり、大会運営のプロフェッショナルでいらした米澤先生が女子委員長を退かれるタイミングで、お声をかけていただき2022年度から札幌地区の女子委員長を務めています。札幌地区は、北海道女子リーグが始まる前から地区独自の活動を継続しており、会長杯札幌女子サッカー大会は2024年に第40回目を迎えます。4種からシニアまで約600名の女子選手が札幌地区で活動しています。中学年代の落ち込みが女子選手競技継続の課題でありましたが、札幌地区の指導者の皆様のご尽力のおかげでU-15(中学生)年代のチームが徐々に増えてきています。また、高校チームも数を増やし、そして強くなっていることを目の当たりにします。北海道女子サッカーリーグ連覇中の札幌大学や北海道で初めて全国リーグに参戦したノルディール北海道も札幌地区に所属しています。長く競技を続ける選手が多いことも札幌地区の特徴です。

北海道シニアサッカー連盟の皆様のご協力のおかげで、道央シニアリーグで女子選手の活動の場を提供していただいています。JFAの競技改革の影響もあり、大人の大会だけではなく、今ではU-15、U-18リーグの全道大会が当たり前になってきています。女子サッカーの世界では、U-15年代以上は、大人の大会にも参加できることから、全道大会だけでチームの活動が過密になってしまいます。そのため、現在、会長杯は4チーム、市リーグは5チームで構成するにとどまっています。一方でシニアの活動できる場を増やすべきだと考えており、今後、シニアのためになる事業を地区で積極的にできないかと考えています。

生涯スポーツとしてサッカーを楽しむ

自分自身は、サッカーは生涯スポーツだと考えています。女性は、職業についたり、結婚したり、お母さんになったりと、様々なステージを迎えて、ときにサッカーから離れることもあると思いますが、サッカーをしたいと思ったときにいつでもできることを思い出してほしいと思います。支えてくれる人は、きつといいます。私にとっては家族です。娘が小さかったときも日曜日にサッカーに行かせてくれて、その間は娘たちを子守してくれた家族に感謝しています。シニア連盟の皆さんに後押しされてこの年になって3級審判員を取得したのですが、今、大きくなった長女が、審判員として経験を積んでおり、今では私の先輩です。私は、60歳になったらねりんピックに出場することが目標です。まだまだ成長の途中です。女子全てのカテゴリーでいつでもどこでも楽しくサッカーできる環境になればと思います。若い皆さんには、チームの仲間と一緒に思いっきり動いて、サッカーを楽しんでもらいたいです。

MIKOTO OMURA

大村 美詞

サッカー女子1級審判員

空知地区サッカー協会審判委員会女子部

北海道教育大学岩見沢校サッカー部マネージャー・女子サッカー部

2023年、サッカー女子1級審判員に合格された大村美詞さん。

サッカーを楽しむ気持ちとサッカーを通じて出会った人たちを大切に、

国際審判員を目指して歩みを進めていっしょいます。

男子と同じトレーニングメニュー

父が小学校教諭でありサッカー少年団で指導していたので、小さいころからサッカーは身近なスポーツでした。小学1年生のとき、入学後に仲良くなった友達がサッカー少年団に入ったことで興味を持ち、「私もやりたい!」と両親にしつこくお願いしたことを覚えています。日に焼けて真っ黒になっている父を見ている母としては、一人娘である私がサッカーをはじめることには、抵抗があったようです。今となっては笑い話の一つだと思います。母も根負けしたのか、3年の冬、フットサルが

始まる時期から東 FC への入団が叶いました。

サッカーへの熱は、中学に入っても冷めることはなく、男子と混じってサンク FC でプレーを続けました。トレーニングのメニューは、当然ながら男子と同じです。今考えても、ありえないほどのメニューをよくこなしていたなと思います。とくに走りのメニューは自分にとっては辛いものでしたが、必死にくらいつこうとしました。自分に嫌気がさしながらも、最後までやり抜いたことは、メンタルが鍛えられたと思いますし、自信にもつながりました。ここで培ったフィジカルは、今の審判活動でも活かしていると感じます。

審判員としてサッカーに関わる選択

地元の高校に進学するにあたって、選手としての道をあきらめたのですが、そのようなときに、ユース審判員の活動に誘っていただきました。サンク FC では練習試合で副審を経験したことしかなかったのですが、サッカー



に関わりたいという気持ちは強く、選手以外の選択肢を見つけることができました。北海道には大岩さんや手代木さんといった国際審判員として活動されていらっしゃる方がいらっしゃいますし、道内の大会でも多くの女性審判員の姿を目の当たりにしていたことも大きかったと思います。高校1年生から審判員として上を目指していくことを決めました。

審判員としての活動をはじめ、空知に生まれ育ったことを心からよかったと感じています。ユース審判として活動する中で、空知地区の皆さんのおかげでピッチの中でも外でも様々な経験を積みさせていただきました。私の成長を自分のことのように喜んでいただく本当の家族のような存在です。2級にステップアップし、北海道女子サッカーリーグなどの全道大会でも笛を吹かせていただけるようになってからも、常に寄り添ってくださっています。辛いなと思うと、とことん落ち込んでしまうタイプなのですが、皆さんの支えもあり、すべて自分の成長につながって

いると言いついて聞かせてプラスになるようにしています。この土地に生まれ、皆さんに支えていただくことができなければ、活動はつづけていなかったと思います。

サッカーが好きだという気持ちだけで、様々な形でサッカーに携わっている方々と出会うことができました。サッカーを通じて、沢山の仲間に出会えたことは私にとってかけがえのないものです。選手、審判、指導者、運営スタッフ、応援される方々が、共に試合を作り上げることに素晴らしいことはないと思います。だからこそ、サッカーに関わる誰もが、周りの方々と環境に感謝し、常にリスペクトの気持ちを忘れずにいて欲しいと思います。そして、北海道に住む全ての人が、サッカーをやりたいと思った時に出来る環境になったら良いなと思っています。私もその一助になれたらと思っています。

目標はワールドカップで笛を吹くこと

今年度、女子サッカー1級審判員認定試験に合格しました。空知地区をはじめ、北海道の各種大会で、成長する機会をいただいた皆さまに感謝しています。これからは、WEリーグにも活動の場を広げることができそうですが、これからも多くの経験を積み、国際審判員を目指します。ワールドカップで笛を吹くことを目標にしています。どんなことがあっても、自分の軸がぶれることのないように成長していきたいです。そして常に楽しむことを忘れずに審判活動を続けていきたいと思っています。

高校1年生のとき、審判員を目指すことを伝えてからずっと、両親は、私の気持ちを一切否定せずに見守ってくれました。これからより広く活動して自慢の娘になれるよう頑張りたいと思っています。



ERIKO ABE & MIKI ABE

阿部 恵理子

(一社)札幌地区サッカー協会 審判委員会・女子委員会 委員

NPO法人札幌フットサル連盟 専門員

サッカー2級審判員・2級インストラクター、フットサル2級審判員・3級インストラクター

阿部 美季

サッカー2級審判員、フットサル2級審判員

北海道の各種大会に阿部さん親子の存在は欠くことができません。

真摯で、かつ前向きな審判活動が、
道内の女子サッカー・フットサルを支えています。

娘の存在が支えに

(恵理子さん) 私自身は中学まで剣道、高校では弓道をやっていましたが、長男が小学4年生でサッカー少年団に所属したことでサッカーと出会い、選手未経験の状態から審判活動を開始しました。とにかく時間があればサッカーやフットサルの試合映像をみて勉強しました。勉強の一環として週末に様々なカテゴリーの試合を見学し、審判の動きを学ばせて頂いたところから声をかけて頂き、現在



は、札幌地区協会審判委員会、札幌フットサル連盟に所属しています。

看護師として整形外科に勤務していますが、どんなに勤務が忙しくても、週末の稼働が楽しみになっており活力になっています。サッカーで培ったチームワークは仕事にも活かしているのではないかと思います。

試合を見ることと審判をすることが、自分のモチベーションUPになっています。一緒に活動してきた審判仲間が、各大会で活躍しているところを見たときや信頼できる先輩と審判活動を続けられていることが幸せだと思えます。一人で出来ないことも協力を得ることで達成できることを審判活動から学んでいます。

そして娘の存在は大きく、自分の支えになっていると感じます。同じピッチに立ったとき、振り返りの中でしっかりと意見を述べ



られるところは、今までの審判活動や研修会に参加させて頂いた経験が活かされていると感じ、頼もしく思います。

今、自分自身も審判員として稼働しながらインストラクターとして審判員の普及、育成に携わっています。若い皆さんにはチャンスがあったら挑戦してもらいたいと思いますし、私自身、自分が出来ることを考え、北海道の女子サッカーの環境改善に貢献していきたいと考えています。

全国にいる仲間との出会い

(美季さん) 小学2年～小学6年まで少年団で活動し、中学入学後は新しい競技をやりたいという思いから中学ではバレー部に入部しました。部活引退後の中学3年生で母に誘われ国際審判員の方の講演に参加したことをきっかけにサッカー4級審判員の資格取得。高校では審判活動も兼ねてお世話になった小学校の少年団のコーチとして活動しました。全く指導経験はなかったものの低学年を担当してもらい、全学年の試合に帯同審判として参加しました。その後、高校2年で3級、高校3年で2級を取得しました。

3級に受かってすぐのころに静岡での全国研修に参加させて頂いたことが印象に残っています。全国からユース審判員が集まって、

同じ場所で数日間トレーニングや講義、試合を経験させて頂き、とても刺激を受け、審判がすごく楽しいと感じました。その後も、全日少やクラブユースの全国大会などの全国研修にも複数回参加させて頂いたことは貴重な経験になりました。全国での研修会では、自分の課題を見つけ、成長につながると実感できるだけではなく、たくさんの仲間との出会いが生まれ、再会や仲間の活躍はとても嬉しく、自分の支えであり、かけがえのない存在です。

現在、看護学生ですが、2月の国家試験で合格できれば看護師となり4月から病院勤務の予定です。審判活動で培ったリーダーシップや積極性を仕事に活かしたいです。

試合をやる度に思うようにできず、どうしても良いのかも分からなくなるときもありますが、初心に戻ってみたり、前向きな言葉を下さるインストラクターの方々に沢山サポートして頂いて前を向くことができています。また、審判活動を経て得られた仲間の存在はとても大きく、サッカーが楽しい・好きだと思えたのは仲間のおかげだと思います。そう思ってくれる人が少しでも増え、プレーをしながらでも審判もやってみたくて興味を持ってくれたらうれしいです。私も育成や普及のために役に立てたら良いなと思います。



審判員の役割



審判員は、選手が最大限の力を発揮できるように、競技規則を学び、大会の位置づけや試合に出場するチームを理解して試合に臨んでいます。大会ごとに定められた資格を有する審判員が派遣されて、たとえば、北海道女子リーグでは、2級審判員以上が主審を務めなければなりません。実技・体力・学科の試験をクリアするためには、日々の研鑽が不可欠です。

試合後には、ファウルや不正行為の判断基準や審判員同士の協力、ゲームコントロールなどについて分析し、反省をもとに、

次の試合に向けて課題の改善を行っています。正しく競技規則を施行するために積極的に自分の考えを共有しています。また、講習会などを通じて競技規則の理解に努めています。試合終了までしっかりと走り切り正しく判定ができるよう、自分自身の課題や長所を把握したフィジカルトレーニングを皆積極的に行っています。

学生や社会人など様々な方が審判員として活動し、毎試合よい準備をして試合に臨んでいます。

審判委員会では、女性審判育成にも力を入れ、講習会を増やす取り組みを進めています。選手やチームがよりよいパフォーマンスを発揮できる審判、選手とともにサッカーそのものを楽しみながら、活動できる審判の仲間を増やしていきたいと考えています。

蝦名 隆幸
(公財)北海道サッカー協会
審判委員会 女子担当

空知サッカー協会審判委員会はユース審判員の発掘・育成に力をいれています。

ブラクティカルトレーニングや実戦形式のユース研修会を開催し、審判員というサッカーへの関わり方があることを知ってもらうことからスタートした研修会ですが、最初の不安そうだった表情から一転しもっ

と知りたいと意欲を持って参加してくれたことがとても印象的でした。

今後も審判の世界へ興味を持ち一緒に活動していくことのできる仲間を増やしていけるような事業を継続していきたいと思っています。

長浜 杏名
サッカー2級審判員
空知サッカー協会 審判委員会
女子部 部長



道新旗北海道女子サッカーリーグ 兼 皇后杯JFA全日本女子サッカー選手権大会北海道大会



第18回(2023年)大会優勝チーム
札幌大学女子サッカー部ヴィスタ



2006年にスタートした北海道女子サッカーリーグは、北海道で最も権威のある女子サッカー大会に位置づけられます。2020年からは、皇后杯JFA全日本女子サッカー選手権大会北海道大会を兼ねることとなり、道内屈指の強豪チームが全国の切符と道新旗をかけて戦います。半年間におよぶ真剣勝負が、選手たちの成長を促しま

す。

世界を制したなでしこジャパンのメンバーで、WEリーグファーストゴールを決めた高瀬愛実選手(北海道文教大学明清高校出身)も、本リーグで活躍した選手の一人です。また、全チームが、ホームゲーム運営を経験し、大会を支える力も養われています。

WEリーグが11月に開幕し今年3年目を迎えました。このリーグに審判として携わることが出来ることに幸せを感じています。WEの選手は3年目を迎え、プレーの質や強度がより一層増してきて、どの試合も面白くて、こちらも夢中になってしまいます。W杯でのなでしこJAPANの活躍もあり、勝つことへ熱い気持ちなど意識の高さがプレーへそのまま現れているように感じます。

道リーグでは、活躍している選手層が様々な年齢や体格差、経験などの違いがありますが、私はそこが魅力だと思っています。今後は北海道のトップリーグから多くのWEリーガーが出てくれることが楽しみですし、心がワクワクするようなプレーを引き出せるよう、携わる審判員は懸命に努力を惜みず、サポートしていけたらと思います。

稲葉 里美
サッカー女子1級審判員



北海道女子8人制リーグフェスティバル 北海道レディースエイトリーグ



北海道レディースエイトリーグ
第1回(2012年)大会優勝チーム
札幌ポニータFC

参加する選手もあり、ピッチには笑顔があふれ、ピッチの外では、選手のお子さんの応援の声も響きます。

北海道シニアサッカー連盟と北海道フットサル連盟の皆さんにも運営にご協力をお願いしており、シニア連盟の皆さんには、審判やチームの帯同審判の指導にもご尽力をいただいています。



2023年度優勝チーム
ノ-NAME

2012年、北海道内の女子サッカーの普及を目的としてはじまったレディースエイトリーグは、JFA登録に限らず参加できる8人制の大会です。レベルアップを目指して参加するチームだけではなく、親睦を目的としてこの大会のために選手を集めて参加するチームもあり、幅広い年齢層の選手が参加しています。現役中高生からシニア世代まで参加しており、また会場となる札幌の近郊チームばかりではなく、稚内や函館、旭川、釧路など道内各地からこの大会を楽しみにしている選手たちが一同に介して一つのピッチで戦います。親子2世代で

ロッカフォルテとしてエイトリーグに参加するのは初めてでしたが、とても楽しい大会で選手たちの笑顔が絶えず、チームとして有意義な経験となりました。

同年代だけでなく、様々な年代のチームと戦わせていただき、8人制の良さである

“ボールにたくさん関わり、ボールにたくさん触れる”ことでプレーの選択、判断力の向上、ポジショニングなど選手たちの成長にも繋がる大会となりました。

エイトリーグの審判や運営などありがとうございました。



黒坂 佳小里
ROCCAFORTE TOKACHI
監督

全道O-30女子サッカー大会 兼 JFA全日本O-30女子サッカー大会北海道大会



第35回(2023年)大会優勝チーム
室蘭アイスバーズ

若年層からサッカー経験のある選手がO-30のステージに到達し、北海道の女子シニア世代が活気づいています。なでしこ2部のノルディア北海道や高校女子サッカーを牽引するチーム出身選手の活躍はも

全道O-30女子サッカー大会
第1回(1989年)大会優勝チーム
登別エストレリータ女子

ちろんですが、大人になってから競技をはじめた選手のレベルも上がっており、大会全体の競技水準が高まっています。

真剣勝負の中にも、試合内外でのコミュニケーションの中、随所で笑顔がみられ、サッカーをプレーし続ける楽しさを感じることができる大会ともいえます。

参加チームも徐々に増えており、今後の発展が楽しみな大会の一つです。

2023年度は、高崎先生の監督のもと、選手が集まり DIVERTI (ディベルティ) として大会に参加させていただきました。

高校女子サッカー部・女子サッカーチームOGが集まり、年代や居住地も様々でしたが、そんなことを感じさせない一体感で、試合中も試合外もとても盛り上がり、終始笑いが絶えませんでした。また、高崎先生の昔と変わらないサッカーに対する情熱や姿勢に、選手達も気持ちあるプレーで応え、まるで青春時代を見ているかのような懐かしい気持ちになりました。

残念ながら準優勝という結果でしたが、選手達の楽しみながらも熱いプレーで戦う姿にとても感動し、私自身も熱い気持ちにさせて貰いました。

女性が大人になってもプレーを続けること

は容易なことではありませんが、サッカーの楽しさを知っているからこそ、仲間や繋がりがあからこそ続けられる事を改めて感じました。サッカーの楽しさやこの繋がりをどんどん広めていくと同時に、次回大会こそは優勝したいと思います!!



太田 郁美
DIVERTI コーチ



道新カップ

北海道女子8人制サッカー大会



全道大会として各地区の代表チームが参戦する道新カップ。全道選手権大会としてトーナメント形式で開催していた皇后杯予選が、2020年度より北海道女子サッカーリーグを兼ねることとなったため、新たな全道大会としてスタートした大会です。各地区に1枠が与えられる8人制の本大会は、中学生から大人まで参加でき、女子サッカー普及の一助となっています。親子や姉妹で参加する選手や、久しぶりの交流を図る選手たちの姿も見られ、和気あいあいとした中にも真剣勝負が展開され、

私たちは普段少人数で活動し、道新カップが初めての公式戦でした。緊張もありましたが全員が楽しくサッカーをし、戦うという事を身に染みて感じる事が出来ました。試合が終わった後にチーム全員が楽しかったと言ってきて参加して良かったと感じました。試合に参加するまでは心配な

見ごたえのあるゲームが繰り広げられます。優勝チームには道新カップやメダルが授与されることもチームにとっては大きなモチベーションにつながっています。



家族で参加されるチームも

道新カップ北海道8人制サッカー大会 第1回(2022年)大会優勝チーム 室蘭アイスバーズ



第2回(2023年)優勝チーム
室蘭アイスバーズ

面が多々ありましたが、協会からの支援を頂き、皆で同じユニフォームに袖を通すことが出来て嬉しい気持ちでいっぱいでした。文教大学に関わって頂いた関係者の皆様のお陰で試合に参加することが出来ました。感謝の気持ちを忘れずまた道新カップに出場したいです。

藤沢 萌

北海道文教大学女子サッカー部



大学



大学フェスティバルの様子

大学は、高校卒業後に高いレベルで選手を続けるための重要な受け皿の一つですが、道内には大学女子チームが少なく、大学チームとして試合経験を積むことが難し

(一財)全日本大学女子サッカー連盟への加盟大学数は86大学(令和6年1月現在)であり、その内北海道の大学加盟数は札幌大学のみとなっております。他地域では大学生同士のリーグ戦を行えるだけの大学数が加盟している中、北海道内ではリーグ戦が実施できない状況であり、大学生同士ならではの競技レベル向上や大会を支える運営能力の向上等、人間形成には欠かせない「目配り・気配り」を育むことができない、極めて厳しい状況にありました。そこで、何かできることはないかと考えて創出したのが、「北海道大学フェスティバル」です。

今年度は3大学(札幌大学・仙台大学・周南公立大学)の参加となりましたが、普段試合を行う機会の少ない地域の大学と試合を行うことで、選手たちから、「同じ大学生に負けたくないといったプライドや目の色を変えてプレーをする姿」を見て、競技力の向上は間違いなくここにあると感じました。

また、審判なども学生が中心になって取

いことから、2023年度から、全国の大学を招待して行う北海道大学女子サッカーフェスティバルを開催。札幌大学が中心となって実現しました。

また、北海道協会では、大学チーム支援制度を開始し、2023年度は文教大学が申請し、道新カップに出場しました。

学生たちは、女子サッカーを支える人材となっていくことも期待されており、卒業生たちが、指導者やチームスタッフとして道内で活躍の場を広げています。

組んでおり、常に周りを見て動いている姿勢を見て、ちょっとしたことかもしれませんが成長を感じました。今後は規模が大きくなればなるほど運営能力が求められますので、学生達には大会運営のありがたみを感じ、更なる人間力向上を図れるフェスティバルにしていきたいと考えています。

勿論、WEリーグやなでしこリーグ、海外のプロリーグに輩出していくことも大事ではありますが、このようなフェスティバルを通じ、社会に出ても恥じない人材を輩出することを目的としたフェスティバルにしていき、ゆくゆくは大学生の夏の全国大会にしていけるものとしていきたいです。

氏家 新司

(一財)全日本大学女子サッカー連盟
北海道サッカー協会女子委員(大学)
(一財)全日本大学女子サッカー連盟
北海道担当理事



U-18 (高校生) 年代

U-18女子サッカーリーグ北海道
2022年度大会優勝チーム
北海道文教大学明清高等学校

北海道高等学校総合体育大会
第1回(2011年)大会優勝チーム
北海道大谷室蘭高等学校

北海道高等学校女子サッカー選手権大会
第1回(1992年)大会優勝チーム
札幌明清高等学校

北海道U-18女子サッカー選手権大会
第1回(1998年)大会優勝チーム
札幌明清高等学校

U-18年代には、クラブと高校の部活動の二つの活動場所があります。U-15年代から大人の選手と一緒にプレー経験を積むことのできるクラブにはU-18選手権があり、学校生活を含めて行動を共にする仲間と過ごす高校部活動は、インターハイと選手権があります。年間を通じて試合経験を積めるよう、2022年度より、クラブと高校部活動のいずれもが参加できるU-18女子サッカーリーグ北海道がスタート。U-18年代のレベルアップに大きく貢献しています。

2022年からU-18女子サッカーリーグが発足し現在10チーム(クラブ2チーム、高校8チーム)の2部制で開催しています。

立野 友之

(公財)北海道サッカー協会
女子委員会 U-18部会長
北照高等学校女子サッカー部監督



U-18女子サッカーリーグ2023北海道
第32回(2023年)北海道高等学校女子サッカー選手権大会
優勝チーム 北海道文教大学附属高等学校



第12回(2023年)北海道高等学校総合体育大会
優勝チーム 北海道大谷室蘭高等学校



第26回(2023年)北海道U-18女子サッカー選手権大会
優勝チーム クラブフィールズ・リンダ

各種大会や北海道女子リーグ、地域リーグと参加チームは重複しこのリーグに参加いただいておりますが、多くの課題がありこの2年間実施形態を変えながら、より多くのU-18年代のチームが参加できるリーグを目指しております。皆様のご声援よろしくお願いたします。

U-15 (中学生) 年代



第31回(2023年)北海道U-15女子サッカー選手権大会
優勝チーム クラブフィールズ・リンダ

北海道U-15女子サッカー選手権大会
第1回(1993年)大会優勝チーム
FC標茶レディース

U-15年代の女子選手の試合環境を充実させるために、2020年度よりU-15チームが戦うリーグ戦がスタートしました。初年度は1リーグ7チームでしたが2年目となる2021年には、2部制となり、全道各地で中学生による熱戦が繰り広げられるようになりました。同年からは、北海道U-15選手権大会とともに、優勝チームが全国大会

各地区の指導者や女子 U-15 部会員と共に、育成年代に関わる私たちは常日頃から【女子選手が活躍できる環境の向上】、【北



JFAU-15女子サッカーリーグ北海道2023
優勝チーム 北海道リラ・コンサドーレ

JFA U-15女子サッカーリーグ
2020年度(プレ大会として開催)優勝チーム
北海道リラ・コンサドーレ

出場権を得られるようになりました。

北海道U-15女子サッカー選手権大会出場に向けては、リーグ戦上位チームとともに、5ブロック予選が開催されることとなり、指導者やチームスタッフ、地域協会の皆さまのご尽力のおかげで、北海道全体でU-15年代の普及と強化が進んでいます。

北海道女子チーム&選手のレベルアップ】、【次のステージへのバトンタッチ】を模索しているところであります。

今後も各カテゴリーと情報を共有し、北海道女子サッカーを盛り上げる一端を担っていきたく活動を続けていきます。

菖蒲 友幸

(公財)北海道サッカー協会
女子委員会 U-15部会長
十勝FSリトルガールズ 監督



NATSUMI AKAMA

赤間 奈津美

(公財)北海道サッカー協会 技術委員会 女子ユースダイレクター 道東担当
 (一社)十勝地区サッカー協会 女子委員長・フットサル委員・キッズ委員
 (一社)北海道フットサル連盟 女子委員
 NOSAI北海道 十勝統括センター 十勝中部支所 業務課

選手、指導者、女子委員長と、何役もこなしながらも、
 持ち前の明るさで十勝の女子サッカー界を引っ張る赤間さん。

選手や指導者仲間への優しいまなざしと、自分の役割を果たそうとする責任感が、
 赤間さんへの信頼につながっています。

帯広南商業高校女子サッカー部へ

父と兄の影響で5歳くらいからアイスホッケーに熱中し、中学校ではソフトボール部に所属。ポジションはサードでした。中学3年の日韓ワールドカップが開催されたこともあり、サッカーに関心を抱き、帯広南商業高校に女子サッカー部があることを地元新聞で知り、進学しました。高校からサッカーを始めましたが、いつの間にかのめりこんで、卒業後は FC 帯広リトルガールズに入りました。現在も十勝 FS リトルガールズの選手として活動しています。選手として西川明花選手（現



伊賀 FC くノ一三重）と対戦したとき、「ウマすぎ。止めるの無理...」と思ったことを強烈に覚えています。スピードスケートの高木美帆選手と2年間同じチームで一緒にプレーしましたが、スピードも強さもあって、サッカー選手だったらどんな選手になっていたんだろうと思うことがあります。また、30歳を過ぎてからは室蘭アイスバーズの選手として O-30 大会に参加させていただき、人生初の全国を経験させてもらいました。

指導者として、 ユースダイレクターとして

リトルガールズのチーム事情で監督が不在となり、監督兼選手となりました。サッカー経験が少ない自分が監督を務めていたとき、中学生の選手がリトルガールズが増えてきました。その時期に男子社会人チームとの合併があり、監督を交代しましたが、指導者も継続することとなり、選手兼コーチとして活動しました。この間、C 級ライセンスや GKL-1



を取得する時間をくれたチームに感謝しています。FP や GK として選手と一緒にプレーしながら指導することで、選手の近くで言葉をかけ、プレーの難しさを肌で感じ、理解することもできました。選手兼任の指導者としての時間が、指導者としての自分を成長させてくれました。D 級指導者資格しか持っていないときでも北海道トレセンに参加させていただき、十勝トレセンの指導者としても経験を積ませていただきました。

また、北海道では、他の都府県協会に先駆け、女性のユースダイレクターが誕生し、山崎しおりさんがその任に就いていましたが、育休をきっかけとして、各ブロックに女性ユースダイレクターをという声があがり、道東ブロック担当として就任することになりました。ユースダイレクターとして、北海道トレセンでは主に U-14 を担当していますが、現在は、指導よりも要項作成や会場調整など運営の役割を多く担っています。キャンプでは女子選手が安心してトレーニングに全力

を出せるように、宿舎での責任者・運営の責任者を努めています。トレセンの下準備を終え、選手たちも指導者も全力でトレーニングに臨むことができたとき、安堵するとともに大きなやりがいを感じます。もちろん、運営だけではなく、指導でもレベルアップできるよう、フィジカルフィットネス C 級を取得し、選手たちに還元できるよう努めています。

女子委員長として

指導者としてだけでなく、大会運営にも携わるようになり、2022 年に遠藤前委員長から、女子委員長を引き継ぎました。十勝には中学生 2 チーム、高校生 3 チーム、社会人 1 チームの、合わせて 6 つサッカー登録の女子チームがあります。これら 6 チーム以外にもチーム登録はしていない団体があり、フットサル大会などに参加しています。そのような各団体の 15 名で十勝の女子委員会が構成されています。十勝のチームでサッカーやフットサルの大会を行っており、私はその責任者の立場であり、委員のみなさんと協力しながら試合の運営にあたっています。また、十勝地区協会では、各専門委員長が十勝フットサル委員会のメンバーとして活動します。小学生から社会人・シニアまでのフットサル大会の運営を通じて、様々な年代の大会を知ることができ、とても刺激を受けます。

目の前の選手にできることを必死でやっているうちに、様々な役職に就かせていただきました。サッカー界にいて女性活躍を後押ししてくれているのを実感します。本業は別にありますので、目の回る忙しさではありませんが、サッカーを通して多くの人と出会えたことは人生の宝物だと思い、自分にできることを精いっぱいやっていきたいです。

MANAMI SUZUKI

鈴木 まなみ

(公財)北海道サッカー協会 技術委員会 女子コースダイレクター道央ブロック担当
小樽Corsa'rio GKコーチ・事務局
小樽地区サッカー協会 女子委員会 普及委員

競技人生で悩みをかかえ、仲間のおかげで乗り越えてきた鈴木まなみさん。

ご自身の経験を活かして

選手に寄り添った指導を心がけてくださっています。

チームスポーツの素晴らしさを知る

小学4年生のとき、小樽地区の女の子だけのサッカーチームに、2つ上の姉と一緒に参加しました。何も分からない状態で人数合わせのようなスタートでした。それでも、練習に励んでトレセンに参加し、中学生に入ってから、GKとして小樽コルサリオと小樽市立向陽中学校で活動しました。自分から始めたスポーツではなかったので、辞めたいと思うこともしばしばでしたが、増えていくサッカー仲間や、周囲で温かく励ましてくださる方々のおかげで中学3年生まで続け、進学時には選択肢に姉と同じ室蘭大谷高校が



思い浮かぶほどになっていました。

弱いメンタルを克服したくて高校では寮を選択。日々の洗濯や掃除、朝練や道外遠征など初めての経験が多く、毎日がめまぐるしく過ぎました。母子家庭でしたので、母が働きながらいつも一人で大変な家事をこなしていたことをはじめ実感しました。高校生のころは、相談や頼ることが苦手で、自分のキャパシティ以上のことを背負いこみ、3年生のとき部活に出られなくなりました。力を過信し倒れた自分が情けなく、ふさぎ込んでいましたが、地元で入院している間にも同期の仲間、後輩たちが連絡をくれ、また、当時の大岩監督や顧問の庭田先生も親身話を聞いてくださいました。「一人で悩まないでなんでも言いなよ」「もっと頼ってよ」とあの日笑って復帰を受け入れてくれた仲間たちのおかげで、今もサッカーというチームスポーツの素晴らしさが忘れられず、離れられないのだと思います。

高校卒業後は、光塩学園女子短期大学に



進学し、小樽コルサリオで選手を継続していました。学生時代には、札幌大学のインカレ出場にあたって、GKとして出場させていただきました。社会人になってからも小樽コルサリオに所属し、北照高校女子サッカー部と合同で北海道女子サッカーリーグに参戦しました。今でも、道新カップやO-30大会に出場し、現役を続けています。

指導者として成長し、 いつか、バトンを渡したい

お世話になったチームに恩返ししたいと思い、指導者としての活動をはじめました。2004年から続くコルサリオは、WEリーグ選手も輩出しており、現在はU-15リーグに参戦しています。選手の成長にやりがいを見出し、前向きなスタッフばかりです。最近では卒業を機に卒団生が戻ってくるようになり、「お姉さんず」と呼ばれるOG・社会人・学生などでチームのOGを集めて道新カップやコンサドーレ・エスポラーダカップに出場しています。後志管内は市町村間に山間部が多く、人口減少も著しい地区ではありますが送迎や練習会場を工夫して、練習できるよう努めています。

指導者としてレベルアップを図るために、C級、GK-L1資格を取得。高校時代の自分の

経験を活かし、選手たちに「お互いのことをよく知り、考え、認め合うことをしよう」と声をかけ、ここで出会った仲間が実は一生の宝物になり得ることも伝えています。チームの指導だけではなく、小樽地区の総合型スポーツクラブでキッズスクールを担当させていただいたり、トレセンにも関わるようになり、JFAコーチの松田さんに推薦されて、コースダイレクター道央ブロック担当の任に就きました。北海道トレセン事業では、主にU-12女子トレセンを担当し、また道央ブロックトレセンの運営・指導や道央スタッフ間の連絡調整・連携の役割を担っています。普及に向けては、道央の普及コーディネーターの梶原さんと協力しながら活動しています。

指導者としても、自信がなくなることもあります。信頼できるスタッフに相談して乗り越えています。とくに、コルサリオの監督や他ブロック担当のコースダイレクターの4名には、いつも親切に相談にのっていただいています。今では、サッカーが与える挫折や困難などを選手たちが乗り越えていく瞬間から勇気をもらい、サッカーを心底楽しんでいる姿からは元気をもらっています。

北海道のサッカーが全国でも上位に通用するため、北海道一丸となってリレーションをとりカテゴリー問わず高めあえる組織になればと思います。まだ未熟なところがありますが、力を尽くしたいです。GKの指導者として、GKプロジェクトにも力を入れたいと思っています。本村コーチという手本になる方もいらっしゃいますし、北海道協会の中川女子委員長が近くにくださるので、マネジメントや各方面への気遣いを間近で学ばせていただいています。指導も運営面でも成長し、いつか教え子がトップリーグに挑戦したり、指導者になってバトンを渡していけたらと思います。



YU IGARASHI

五十嵐 優

(公財)北海道サッカー協会 技術委員会 女子ユースダイレクター道北担当
中富良野町立中富良野中学校サッカー部・旭川女子アチーブ コーチ

明るい笑顔で、話しやすい環境をつくってくださる五十嵐優さん。

サッカーが身近な競技になるための普及活動も

ご自身の役割だと教えていただきました。

中学教諭として

第二のサッカー人生がスタート

転校が多かったため1年ずつの活動ではありましたが、小学生のころは永山サッカー少年団(旭川市)に、中学では恵庭市立恵み野中学校サッカー部でボールを蹴っていました。中学卒業後は、サッカーから離れましたが、中学校教諭として旭川市立緑が丘中学校に配属されたとき、副顧問としてサッカー部に携わることになり、第二のサッカー人生が始まりました。緑が丘中学校は強豪校だったので、自分が役に立てるのかとても不安で

したが、当時7人いた女子選手とその保護者の方々が、私を頼ってくれているのを感じました。チームの中で、弱い立場になったり、体調面で相談したいときに、女性指導者がいてくれて心強かったと言ってもらえました。自分自身が中学時代に男子に交じってボールを蹴った経験も糧となり、選手たちに寄り添うことができたのではないかと思います。不安を感じながらも、この世界に踏み込んできてよかったなと感じました。しかし、自分が指導者として力不足だったのもあり、もっと役に立ちたいと心残りも感じていました。その思いがやがて女子選手にとってサッカーを続けやすい環境をつくっていききたいという気持ちに変化し、指導の勉強や、女子選手の育成に積極的に取り組むようになりました。

指導者としての歩みの中で、緑が丘中学校の監督の田中拓也先生に出会えたことは、幸運でした。学校の仕事、50名以上いる部活動の運営、ユースダイレクターの仕事、子育てと、何に対しても真摯に向き合っていらっ



しゃる姿は、なかなか追いつけないかもしれませんが、私の理想です。優先順位の見極め方や周りから信頼される質の高い仕事の仕方を見習っていききたいです。何より、コーチングによって選手のパフォーマンスが大きく変わることを目の前で教えていただき、指導者の役割や責任を学ぶことができました。

女子ユースダイレクター

北海道の技術委員会では、女子ユースダイレクターを全国に先んじて設置しており、山崎おりさんお一人でその任についていました。就任当初は、手探りだったのがあっていましたが、山崎さんのご尽力のおかげで、トレセン活動だけではなく、女子選手の育成に関わる様々な指導者との情報交換をし、つないでいくという大切な役割が確立されていきました。そのような中、山崎さんご自身の育休が一つのきっかけとなり、道内の各ブロックに女子ユースダイレクターを配置することがきまり、道北ブロックの担当者として私に声をかけていただきました。

道内5ブロックに一人ずつ配置された女子ユースダイレクターは、カテゴリごとに役割分担しながら活動しています。私は現在、

道北地区の女子選手の把握、北海道トレセンU12女子の運営を担当しています。5人の女子ユースダイレクター全員、尊敬できる方ばかりです。女子ユースダイレクターの在り方を形作ってくださった山崎さんはもちろんですが、同時期に就任した赤間さんは、トレセン運営や新規事業に対して中心になってくださっていて、見習うところが大きいです。全員が北海道の女子サッカーの現状を理解し、もっとよいものにしていくために、惜しまず努力しているので、自分もまだまだ頑張れる、と刺激をもらえます。

サッカーを身近な競技にしていきたい

トレセンなどで小学校から関わっている選手や保護者が顔を覚えてくれて、試合で会ったときなど声をかけてくれるときには、やりがいを感じますし、選手が次のチームに悩むときには相談にのるなど、選手がサッカーを続けられるよう助言できたときは、嬉しく思います。選手と接するたびに、サッカーがもっと身近な競技になってほしいと強く思います。「少年団に入ってなかったから」、「高校からなんて遅い」など思わずに、始めたいタイミングで老若男女誰でも始められるような競技になったらいいなと思います。北海道のチームが全国で活躍するのは素晴らしいことなので、強化に力を入れることももちろん重要だと思っていますが、普及にも積極的に携わっていくことが、私自身の役割だと考えています。

現在、育休中で指導の現場から離れていますが、今後も、選手に近い存在であり続け、サッカーを身近な競技にできるよう微力ながら活動したいと思います。

